

中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書II

鳥取県八頭郡智頭町

市瀬市奥遺跡

2001

財団法人 鳥取県教育文化財団

中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書II

鳥取県八頭郡智頭町

市瀬市奥遺跡

2001

財団法人 鳥取県教育文化財団

序

鳥取県は北に日本海を望み、南は秀峰大山をはじめとする中国山地が連なり、鳥取砂丘、山陰海岸に代表される風光明媚な美しい自然に囲まれた土地です。観光資源、農林水産資源に恵まれた本県では、環日本海交流の推進が提唱されるなか、産業の発展、地域の活性化に向けて、近年道路交通網の整備・充実が一段と進められています。こうした中、開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も増加しており、鳥取県の成り立ちを物語る貴重な遺跡が、数多く発見されております。

当財団では、中国横断自動車道姫路鳥取線(智頭～鳥取間)整備事業に伴い、平成12年度に株式会社サングリーン智頭から委託を受けて、智頭町地内において埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査の結果、落し穴状土坑と考えられるものを含め、13基の土坑が確認されました。

本発掘調査の成果が、今後の調査研究や教育の一助となり、多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、多大なご協力をいただきました智頭町の地元の皆様をはじめ、ご指導いただきました方々、関係機関各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博 充

例　　言

1. 本報告書は、「中国横断自動車道姫路鳥取線(智頭～鳥取間)整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査」として、平成12年度に鳥取県八頭郡智頭町市瀬で実施した、埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 本発掘調査は、株式会社サングリーン智頭の委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した。
3. 本発掘調査は、下記の遺跡を対象として実施された。
市瀬古墳遺跡(鳥取県八頭郡智頭町大字市瀬字ニノ谷2601、字市奥2606-1)
4. 本発掘調査の実施にあたっては、調査地内の調査前地形測量および基準杭の設定を業者に委託して行った。
5. 本報告書に掲載した地形図は、智頭町発行の1/25,000地形図を使用した。
6. 発掘調査によって作成された記録類は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
7. 本報告書は調査員鬼頭が執筆、編集した。本報告書に掲載した実測図、写真図版は鳥取県埋蔵文化財センターで作成した。
8. 発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々からご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して深謝いたします。

智頭町 智頭町教育委員会

凡　　例

1. 本報告書における方位はすべて座標北を示し、レベルは海拔高である。X=、Y=の数値は、国土座標第V系の座標値である。
2. 本報告書において採用した遺構の略称は、以下のとおりである。
SK：土坑
3. 発掘調査時における遺構名は報告書作成時に一部変更した。第1章に「遺構名新旧対照表」を示した。

目 次

序

例言、凡例

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	5
第1節 調査の概要と基本層序	5
第2節 土坑	5
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 調査区位置図	2	第5図 全体遺構実測図	7
第2図 智頭町の位置	3	第6図 SK 1~5	8
第3図 周辺遺跡分布図	4	第7図 SK 6~13	9
第4図 調査前地形測量図	6		

図版目次

図版1 調査前状況	図版4 SK 6断面
図版2 SK 1断面	SK 6完掘状況
SK 1完掘状況	SK 7完掘状況
SK 2完掘状況	図版5 SK 8完掘状況
図版3 SK 3完掘状況	調査区南側部分完掘状況
SK 4・5完掘状況	調査区中央付近完掘状況
	図版6 調査区北側部分完掘状況
	調査区北側半分完掘状況

第1章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、中国自動車道姫路鳥取線(智頭～鳥取間)整備事業を原因とし、八頭郡智頭町市瀬地内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。

道路整備事業に先立ち、平成11年度に智頭町教育委員会が市瀬地内の道路建設予定地の試掘調査を行ったところ、遺跡の存在が確認されたため、記録保存のため発掘調査の必要性が生じた。

鳥取県土木部道路課、鳥取県教育委員会、智頭町教育委員会が遺跡の取り扱いに関する協議を行い、文化財保護法に基づく手続きを経て、平成12年度、財団法人鳥取県教育文化財団が発掘調査を行うことになった。調査を担当したのは東部埋蔵文化財調査事務所である。

第2節 調査の経過と方法

市瀬市奥遺跡は千代川左岸の尾根上に立地する。調査区の北側にあたる尾根の裾には市瀬集落があり、尾根の平坦面を境に西側、東側は急な斜面となっている。排土の流出が危惧されたため、調査区の東側、西側には事前に土留め柵を設置し、調査にあたった。

調査は平成12年11月7日より着手した。調査前地形測量は業者に委託して行った。調査区外に排土置き場を確保できなかつたため、排土は暫定的に調査区の中央付近に置くことにして、重機による表土剥ぎおよび遺構検出作業を、①調査区北側部分、②南側部分、③中央部分の3段階に分けて行っていった。表土除去後2回に分けて業者委託による方眼測量を行い、調査区内に10×10mのグリッドを設定した。調査区北西隅の杭を起点に東へ向かってA、B、C…、南へ向かって1、2、3…と番号を付し、北西隅の交点をグリッド名として呼称した。調査の結果13基の土坑を確認し、12月8日に現場作業を終了した。調査面積は1,330m²である。

第3節 調査体制

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博 充(鳥取県教育委員会教育長)

常務理事 関 敏 之(鳥取県教育委員会事務局次長)

事務局長 岡山 宏 徳

財団法人鳥取県埋蔵文化財センター

所長 古井 喜 紀(鳥取県埋蔵文化財センター所長)

次長 八木 谷 昇

調整係長 山 桥 雅 美

文化財主事 高垣 陽 子

庶務係主任事務職員 矢 部 美 恵

事務職員 田 中 陽 子

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 東部埋蔵文化財調査事務所

所長 八木 谷 昇(次長兼務)

主任調査員 北浦 弘人

調査員 鬼頭 紀子 家塙 英詞 森本 倫弘

補助員 佐藤 謙

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

下記の方々が、発掘作業員として従事した。

植木 タツ子 植木 衡 植木 律子 小川 正之助 國米 慎介
 國米 多賀枝 小谷 照幸 寺坂 次子 西川 富子 藤木 光治
 前村 隆司 山本 信利

表1 遺構名新旧対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
SK1	SK16	SK6	SK13	SK11	SK2
SK2	SK2	SK7	SK4	SK12	SK10
SK3	SK12	SK8	SK14	SK13	SK9
SK4	SK6	SK9	SK11		
SK5	SK5	SK10	SK8		



第1図 調査区位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

市瀬市奥遺跡は鳥取県八頭郡智頭町大字市瀬に所在する。智頭町は、鳥取県の東南部に位置し、東は八頭郡若桜町、北は八頭郡川瀬町、船岡町、八束町、南は岡山県西粟倉村、勝田町、奈義町、西は岡山県勝北町、加茂町、阿波村と接する県境の町である。鳥取県と山陽地方とを結ぶ国道53号線が町をほぼ縦断する形で走り、町の北西で国道は岡山方面へ抜ける53号線と兵庫県佐用方面へ抜ける373号線に分岐する。



第2図 智頭町の位置

市瀬市奥遺跡は、町の北西部、智頭町と用瀬町の町境にそびえる篠山より派生する尾根上に位置する。尾根の裾を千代川が蛇行しながら北へ流れ、川沿いのわずかな平地に市瀬の集落が営まれている。智頭町は町面積の93%を山林が占めるという山がちな地勢であり、林業がさかんであるが、調査地周辺も杉、桧等の植林地となっている。

第2節 歴史的環境

智頭町内においては、中河原古墳、黒本谷古墳(昭和55年)、高下古墳(昭和59年)、市瀬若谷遺跡(平成12年)と、過去4件の発掘調査が行われているが、町内の古墳時代以前の様相は明らかになっていない。

昭和47年に段山(3)で採集された石槍2本は縄文時代草創期に比定され、現在智頭町内における最古の遺物として知られている。市瀬若谷遺跡(2)では、一般に縄文時代に使用されたと考えられている落し穴状土坑が5基検出されており、縄文土器、石錐などの遺物も出土している(註1)。この遺跡は当遺跡の南東約700m地点に位置しており、今回当遺跡で検出された落し穴状土坑とあわせ、この地域が狩猟場であったことを窺わせる。弥生時代の遺物としては、造成工事中に埴輪の長瀬向和で出土したといわれている鼓形器台と肩部に三角形刻線文が施された弥生時代後期の壺が知られており、また高下古墳の周溝埋土および周辺からは美作地方の影響が窺われる弥生時代後期の有段高杯などが出土している。しかし、弥生時代、集落などの生活拠点がどこにあったのかは解明されていない。古墳は町内で28基が確認されている。中河原古墳は、昭和55年、荒神社の墓石移転時に発見された古墳で、墳丘、封土はすでに削平されてしまっていたが、緊急発掘により横穴式石室であることが確認され、玄室より須恵器の蓋、高杯、平瓶などが出土した。黒本谷古墳(4)も果樹園の私設道路敷設中に発見され、緊急調査が行われた古墳である。左片袖式の横穴式石室であることが確認され、出土位置は不明だが、圭頭大刀、銅鏡、轡など、被葬者の勢力の強さを窺わせる優美な副葬品も出土している。高下古墳はほ場整備事業に伴い発見された古墳で、重機による削平を受けながらも、石室基底部および周溝が記録され、玄室内からは須恵器杯、蓋、提瓶、横瓶のほか、耳環、鉄刀、鉄鎌、馬具が出土した。中世の遺物としては三田経塚(11)出土の経筒が挙げられ、室町～戦国時代にかけて築城されたものと考えられる山城は町内で28を数える。

(註1) 智頭町教育委員会 山中章弘氏、木田真氏のご教示による。
参考文献

- 『高下古墳発掘調査報告書』1984 智頭町教育委員会
- 『中河原古墳・黒本谷古墳発掘調査報告書』1983 智頭町教育委員会
- 『智頭町の古墳』1995 智頭町教育委員会
- 『智頭町内発掘調査報告書』2000 智頭町教育委員会



- | | | | | |
|-----------|--------------|-----------|-----------|------------|
| (1) 市瀬古遺跡 | (2) 市瀬小茗荷谷遺跡 | (3) 段山遺跡 | (4) 黒本谷古墳 | (5) 松尾古墳 |
| (6) 中田古墳群 | (7) 富貴谷1号墳 | (8) 三田1号墳 | (9) 三田2号墳 | (10) 三田3号墳 |
| (11) 三田経塚 | (12) 会下谷古墳 | (13) 興田遺跡 | (14) 御坂古墳 | |

第3図 周辺遺跡分布図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要と基本層序

調査区の土層は、基本的に2層からなる。上層に暗茶褐色系の土が5cmほどの厚みで堆積し、その下層に1~3mm前後の礫を含む黄灰褐色土が20~50cm前後堆積している。いずれも遺物は含まない層である。

遺構は黄茶褐色系の土をベースに掘り込まれている。調査区の南側、標高250~254m付近の表土下は風化した岩盤が広がっており、ここでは岩盤が遺構のベースとなっている。調査の結果、落し穴状土坑と考えられる深さ1~2mほどの大型の土坑4基、底面にピットを持つ土坑1基、その他9基の土坑を検出した。

遺構内、遺構外とも、遺物は出土しなかった。

第2節 土坑

SK 1(第6図、写真図版2)

A 8グリッドの東側、標高252.5m付近に位置する。平面形は検出面、底面とも、ややいびつな隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形を呈する大型の土坑である。規模は検出面の長軸約2.4m、短軸1.8m、底面の長軸約45cm、短軸30cm、深さは最深部で2.1mを測る。土層は8層に分けられ、主に上層に暗茶褐色系の土、下層に黄褐色系の礫を多量に含む土が堆積していた。遺物は出土しておらず、時期も不明だが、形態および2mを超す深さがあることから落し穴状土坑の可能性を考えたい。

SK 2(第6図、写真図版2)

A 8グリッドの北東、標高251.8m付近に位置する。検出面の平面形はややいびつな隅丸長方形を呈し、底面は橢円形を呈する。西側部分にはテラス状の段が2段作られている。規模は検出面で長軸1.5m、短軸1m、底面の長軸40cm、短軸25cm、深さは最深部で1.2mを測る。平成11年度、智頭町教育委員会が試掘調査を行った際に確認されていたもので、礫を多量に含む灰褐色土が堆積していたことが記録されている(註1)。遺物は出土しておらず、時期も不明であるが、形態および1m以上の深さがあることから落し穴状土坑の可能性を考えたい。

SK 3(第6図、写真図版3)

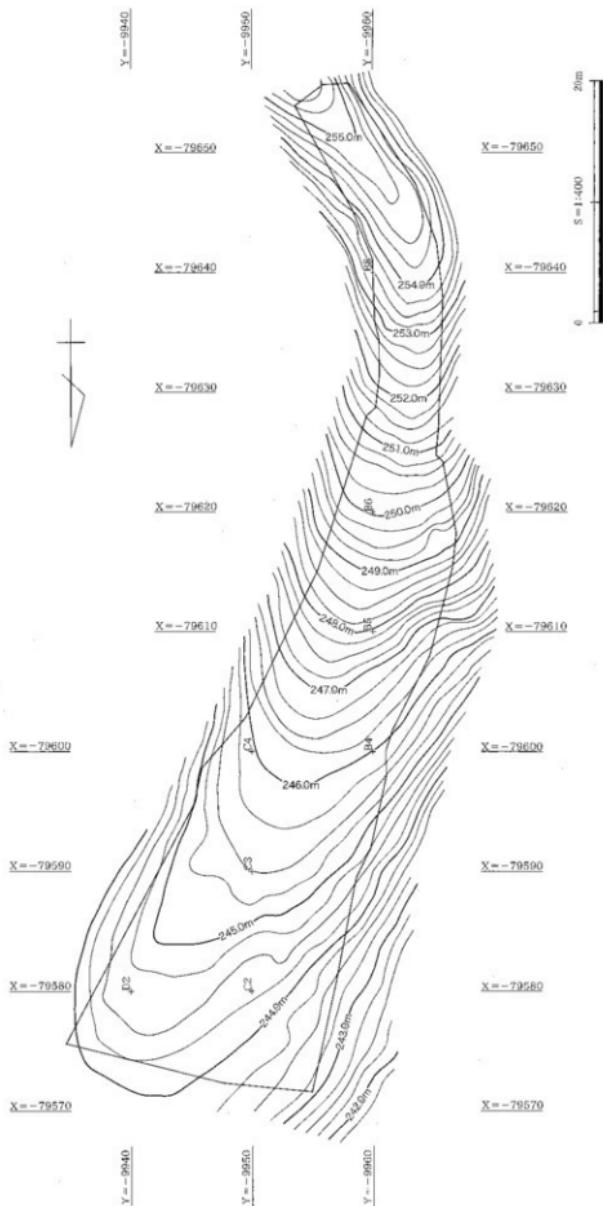
A 6グリッド、標高248.5m付近に位置する。検出面の平面形はいびつな橢円形を呈し、底面は半月形である。規模は検出面の長軸95cm、短軸55cm、底面の長軸45cm、短軸40cm、深さは約65cmを測る。底面の中央付近からやや東に寄ったところには、直径約10cm、深さ約15cmの小さなピットが穿たれている。埋土は地山に近似した黄褐色系の土から成る。遺物は出土していない。底面にピットが存在することから、落し穴状土坑としての性格を考ええる。

SK 4・5(第6図、写真図版3)

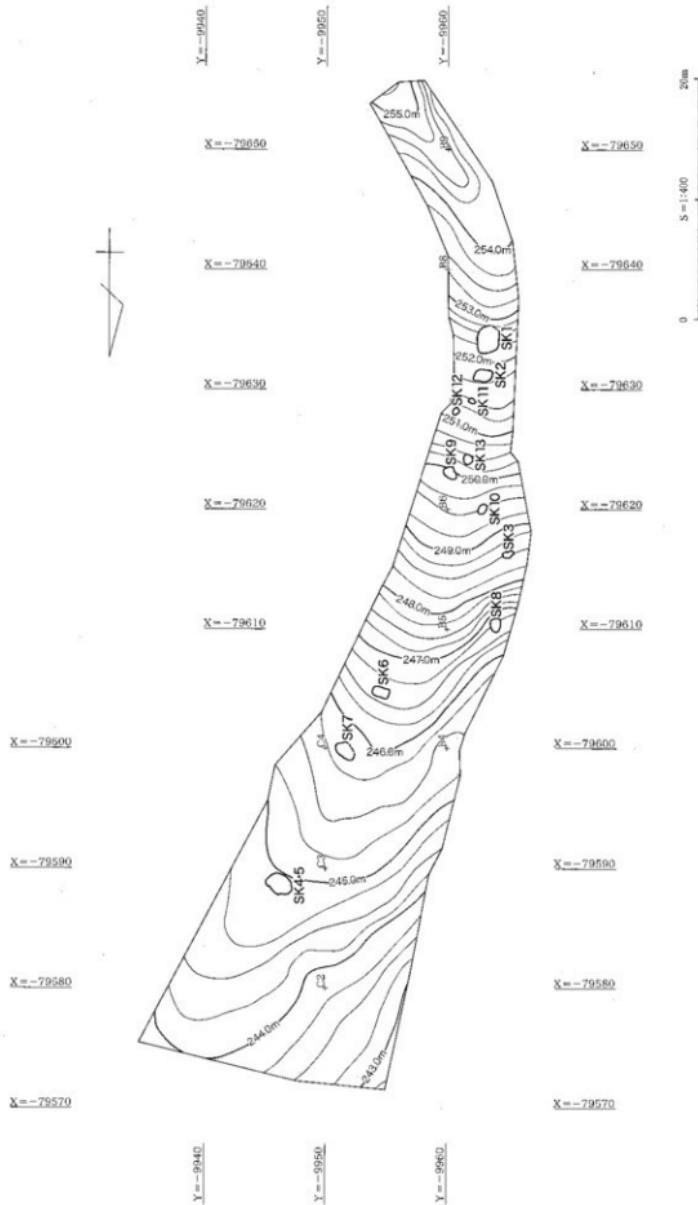
SK 4・5はC 3グリッド南西、標高245m付近に位置する。SK 4の平面形は、検出面、底面とも歪んだ橢円形を呈し、西側、東側にそれぞれ小規模な半月形のテラス状の段をもつ。SK 5の北端を切って作られており、断面は逆台形状を呈する。規模は検出面で長軸約1.7m、短軸は推定値で1.2m、底面の長軸60cm、短軸50cm、深さは1.5mである。遺物は出土していない。規模、形態より、落し穴状土坑としての性格を考えたい。

SK 5は非常に浅い土坑である。北側の肩をSK 4に切られているが、底面のカーブから、本来いびつな円形を呈していたものと推察される。規模は検出面で径約1.5m、底面径約1.3m、深さは最深部で30cmを測る。時期、性格とも不明である。

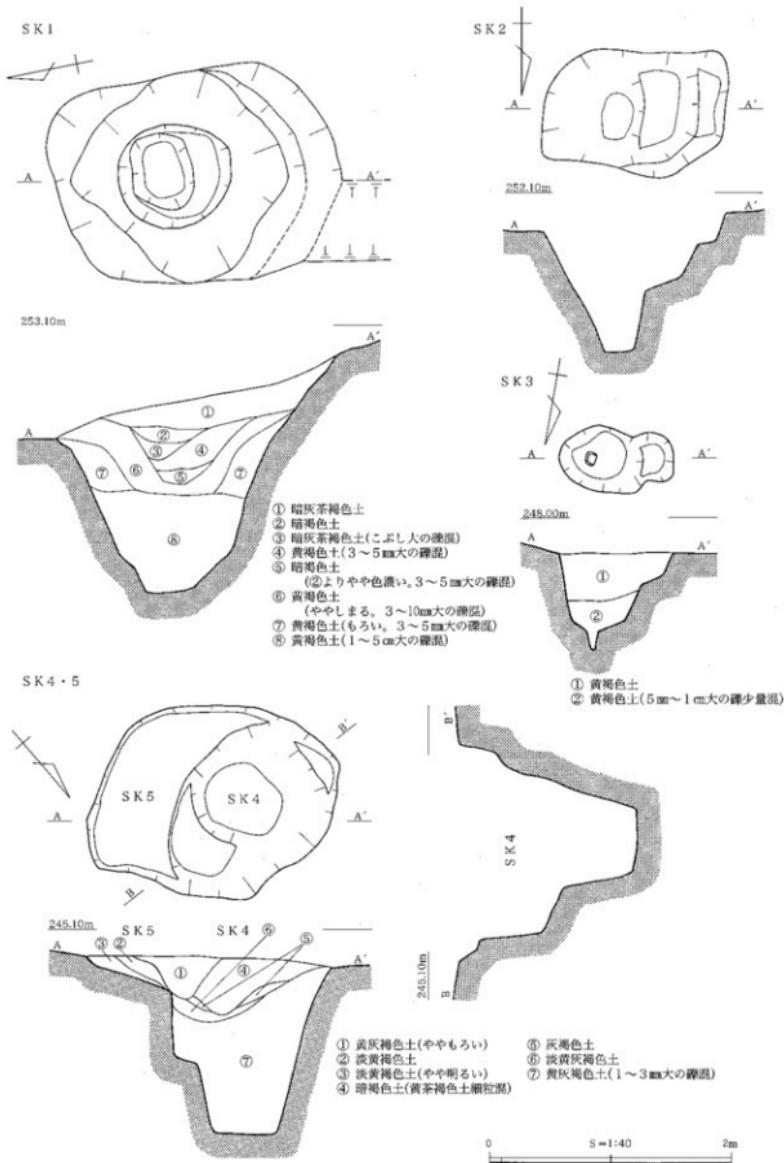
第4図 調査前地形測量図



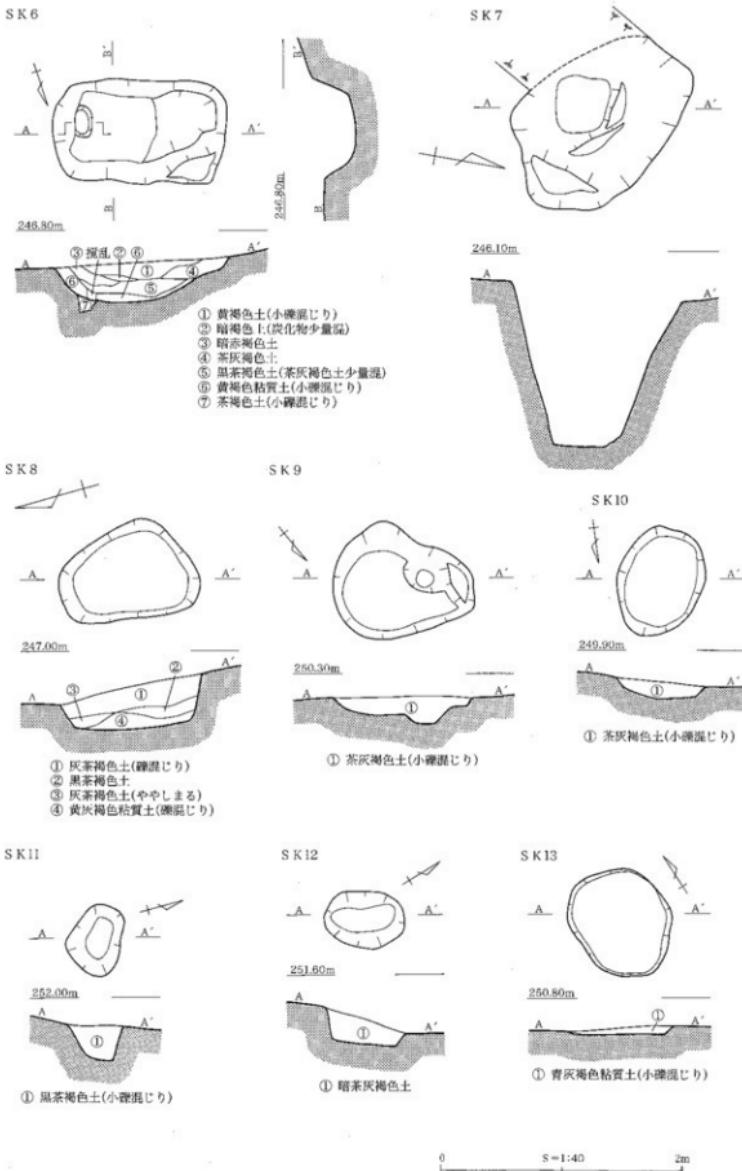
第3章 調査の成果



第5図 全体造構実測図



第3章 調査の成果



第7図 SK 6~13

S K 6(第7図、写真図版4)

標高246.6m付近に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、底面形は歪んだ長方形である。規模は検出面で長軸約1.5m、短軸85cm、底面で長軸70cm、短軸55cm、深さは35cmを測る。東側壁樋には、長軸25cm、短軸15cm、深さ15cmのピットが位置する。遺物は出土しておらず、時期、性格とも不明である。

S K 7(第7図、写真図版4)

標高246m付近、B 3～B 4グリッドにまたがって位置する土坑である。平面形は、検出面では歪んだ楕円形、底面は隅丸方形、断面形は逆台形を呈する。規模は検出面で長軸約1.7m、短軸約1.2m、底面で長軸45cm短軸40cm、深さは最大で1.4mを測る。平成11年度に行われた智頭町教育委員会の試掘調査時に確認されていたものである(註2)。遺物は出土していない。形態および1m以上深さがあることから、落し穴状土坑の可能性を考えたい。

S K 8(第7図、写真図版8)

標高247.7m付近、A 4～A 5グリッドにまたがって位置する浅い土坑である。平面形は検出面、底面とも歪んだ隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。規模は検出面で長軸約1.1m、短軸80cm、底面で長軸85cm、短軸60cm、深さは最深部で40cmを測る。遺物は出土しておらず、時期、性格とも不明である。

S K 9(第7図)

標高250m付近、A 6～B 6グリッドにまたがって位置する土坑である。平面形は検出面、底面とも歪んだ楕円形、断面は浅い皿状を呈する。規模は検出面で長軸1.15m、短軸1m、底面で長軸1m、短軸65cm、深さは15cmを測る。西側の壁樋には径30cm、深さ10cmほどの浅い窪みが伴う。遺物は出土しておらず、時期、性格とも不明である。

S K 10(第7図)

標高249.5m付近、A 5～A 6グリッドにまたがって位置する。平面形は検出面、底面とも楕円形を呈し、断面は浅い皿状を呈する。規模は検出面で長軸90cm、短軸70cm、底面で長軸75cm、短軸55cm、深さは15cmを測る。遺物は出土しておらず、時期、性格とも不明である。

S K 11(第7図)

A 6グリッド南東、標高251.2m付近に位置する。平面形は検出面、底面とも歪んだ隅丸長方形で、断面は逆台形を呈する。規模は検出面で長軸55cm、短軸40cm、底面の長軸35cm、短軸18cm、深さ28cmを測る。遺物は出土しておらず、時期、性格とも不明である。

S K 12(第7図)

A 6グリッド南東、標高251.1m付近に位置する土坑である。平面形は検出面、底面とも楕円形を呈し、断面は逆台形を呈する。規模は検出面で長軸65cm、短軸47cm、底面で長軸52cm、短軸20cm、深さは最深部で25cmを測る。遺物は出土しておらず、時期、性格とも不明である。

S K 13(第7図)

A 6グリッド東、標高250.5m付近に位置する非常に浅い土坑である。平面形は検出面、底面とも歪んだ円形を呈し、断面は逆台形状である。規模は、検出面で長軸95cm、短軸76cm、底面で長軸88cm、短軸70cm、深さ6cmを測る。遺物は出土しておらず、時期、性格とも不明である。

(註1)智頭町教育委員会 2000 『智頭町内遺跡発掘調査報告書』P 6・7に「土坑状遺構3」として報告されている。

(註2)前記の報告書P 4・5に「落とし穴I」として報告されているものである。

写 真 図 版



調査前状況(南から)

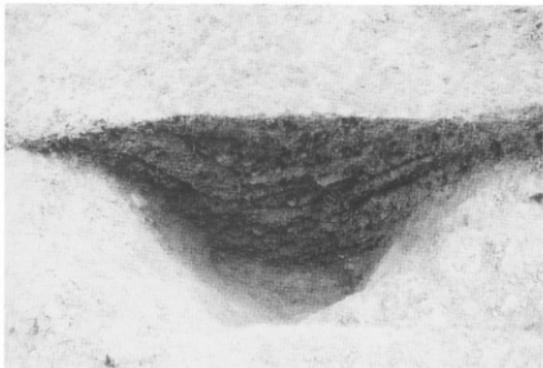


調査前状況(北から)



調査前状況(南から)

図版2



SK 1 断面(西から)



SK 1 完掘状況(西から)



SK 2 完掘状況(北から)



S K 3 完掘状況(北から)



S K 4・5 完掘状況(北から)

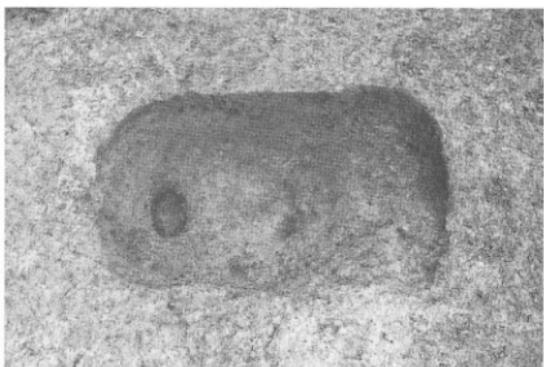


作業風景

図版4



SK 6断面(北から)



SK 6完掘(北から)



SK 7完掘(西から)



SK 8 完掘状況(西から)



調査区南側部分完掘状況(南から)



調査区中央付近完掘状況(北から)

図版 6



調査区北側部分完掘状況(南から)



調査区北側半分完掘状況(南から)

報告書抄録

ふりがな	いのせいちおくいせき						
書名	市瀬市奥遺跡						
副書名	中国横断自動車道(智頭～鳥取間)整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	II						
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書						
シリーズ番号	70						
編著者名	鬼頭紀子						
編集機関	財団法人 鳥取県教育文化財団						
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260番地 TEL(0857) 27-6711						
発行年月日	西暦2001(平成13)年3月30日						
所収遺跡名	所在地	コ ー ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市瀬市奥遺跡	鳥取県八頭郡 智頭町	市町村	遺跡番号	35° 16'	134° 13'	20001107 ~ 20001208	㎡ 1,330
	大字市瀬	31328	63	59" 37"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
市瀬市奥遺跡	その他の遺跡	不明	土坑	なし			

鳥取県教育文化財団調査報告書 70

中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書II

鳥取県八頭郡智頭町

市瀬市奥遺跡

発行 2001年3月30日

編集 財団法人鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 岩美郡国府町宮下1260

電話 (0857) 27-6711

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 山本印刷株式会社